

渡米した教材「ロビンソン・クルーソー物語」

——19世紀末のアメリカ・ヘルバルト主義による教育的変容——

藤 本 和 久

I はじめに

19世紀末、「ある教材」が、さまざまな思惑に支えられながら、初等教育のある段階で1学年にわたって展開された。とりわけ、その取り扱い上きわだっていたのはアメリカ・ヘルバルト主義の提唱した中心統合法であるが、そこでは一教科（一科目）がカリキュラム編成のスコープの中心に位置しシーケンスを担ったというのではない。「一教材」がカリキュラム編成を支配したのである。そのような大胆なカリキュラム編成を要求した教材は米国の教育実践史上、「ロビンソン・クルーソー物語」（以下、「ロビンソン」）以外には見当たらない。この教材の導入について熱心で具体的にカリキュラムに位置づけたのは、アメリカ・ヘルバルト主義者であるが、公立学校、教員養成系大学の付属学校、さらには進歩主義的な実験学校（中にはデューイの実験学校）にいたるまで、この教材を導入した。それほど全米の初等教育界を席卷するものであったのである。

この教材の帰属する教科（科目）は曖昧である。時には「文学」であり、「オーラル・ワーク」であり、「歴史」に位置づけることもある。このことは、この教材の超教科性を意味するだけでなく、多教科分立型から相互関連型への再編の具体的方策を示す焦点として期待されていたことも意味している。アメリカ・ヘルバルト主義者は、この意味で「ロビンソン」を教材研究の対象として最も深く、理解し、カリキュラム再編にもまたそれを支える彼らの一連の教授理論の証明にも利用した人たちであった。この教材とあわせて検討することで、19世紀末におけるアメリカ・ヘルバルト主義教授理論の具体的実効性が明らかになってくる。

一方、「ロビンソン」を巡っては、そのイデオロギー性に焦点をあて、原作から変形されていった過程を追う研究も存在する。岩尾のいう⁽¹⁾「教育的ロビンソン」にあたる、「ロビンソン」の教材化は、それ自体原作とはかなりかけはなれており、国民国家形成の道具とされるものであった。その文脈でいうと19世紀末の米国における教材「ロビンソン」はどのような性格を帯びたものであったのだろうか。本研究は、米国教育実践史におけるヘルバルト主義の位置づけ作業と「ロビンソン」そのものを対象にしそのイデオロギー性変遷をおう作業との交点に位置している。

II 教材「ロビンソン・クルーソー」

『ロビンソン変形譚小史 物語の漂流』を著した岩尾龍太郎は「ロビンソン」の変形時期区分を以下のように設定している⁽²⁾。

まず、原作があらわされてからルソーの『エミール』が出されるまでの第1期「直接的模倣譚(逃避型恋愛冒険)」(1719-1762)、『エミール』から『スイスのロビンソン』までの第2期「教育的ロビンソン」(1762-1812)、そしてピーターパン上演までの第3期「冒険ロマン的ロビンソン」(1812-1904)、それ以降の第4期「寓意的ロビンソン」(1904-)の4期にわけられている。

本稿で注目するのは、第2期・第3期であるが、岩尾は、『エミール』におけるロビンソンへの言及が18世紀における啓蒙的教化傾向に拍車をかけ、「ロビンソン」=子ども向けの読み物という先入観を形成することにつながったとしている。そこでは、島=学校となり、少年化された主人公が自然を対象に自己学習し、「市民」として社会に復帰する姿が描かれている⁽³⁾。

そして、ルソーの影響をうけたドイツのカンペ(Campe, J.H.)による『新ロビンソン(Robinson der Jüngere)』(1779-80)が、①内容面でのストーリーの単純化、②知識注入のための形式の改変、という特徴をもち、「年少読者に物語の快楽とともに博物学的な知識を注入し、…神観念と社会道徳を刷り込む卓抜な読本」として19世紀の教育界に「無意識に入り込」んだ⁽⁴⁾のである。

岩尾によれば、第2期の「教育的ロビンソン」はカンペの改作を継承する形で、ドイツ・ヘルバルト主義のツィラー・ラインらによって教材化され、第3期の19世紀後半に大量に出回ったとされている⁽⁵⁾。そして、1880年代後半に、ドイツのヘルバルト主義教授理論を学んだ「イエナ詣で」の留学生たちが、教材「ロビンソン」も伴って帰米し、初等教育カリキュラムの再編にとりくんだのである。さらに、ヘルバルト主義教授理論を積極的に初等教育現場で実践したマクマリー夫人(McMurry, L.B.)らによって英語版教材『少年・少女のためのロビンソン・クルーソー(Robinson Crusoe for Boys and Girls)』(1894)⁽⁶⁾が作られた。

III 「ロビンソン」に託されたアメリカ・ヘルバルト主義教授理論

1. 開化史段階説=仮説の提示

開化史段階説は、子どもの発達段階を人類の文化的発展史とのアナロジーでとらえ、それをカリキュラムの排列の原理とした理論である。カリキュラムの編成原理として中心統合法を説いたのはヘルバルト主義に限らず、進歩主義の父と称されるパーカー(Parker, F.W.)も主張したのであるが、パーカーのカリキュラム論には明確な排列の原理はなかったといえる。そもそもパーカーの中心統合法は地理を中心においたことと、教育理念上は子どもを編成原理の中核とみるべく視点転換をおこなったことに排列原理の希薄さは起因している。一方、ヘルバルト主義におい

ては、ドイツもアメリカも歴史（文学）を中心としたために、カリキュラムの順次性を明示することは容易でもあり、必然でもあったといえる。進歩主義的立場においては、カリキュラムの排列原理は子どもの興味や意志に依存すると説くのであるが、実はヘルバルト主義もそれに変わりはない。つまり、開化史段階説は子どもの興味とは矛盾なく一致すると考えられていたのである。F.マクマリーは、ある特定の時代の人類に興味を与えたものは、それに対応する年齢の子どもにも興味を自然にもたせるものであるとしている⁽⁷⁾。

人類の動機と行動を扱う歴史（文学）⁽⁸⁾は人格形成に対する貢献度において他教科の追従を許さない、ゆえに他のあらゆる教科を中心的にコントロールできる立場にある教科であると考えられている。そこでは、開化史段階説が子どもの興味と一致するものであることが是が非でも証明されていなければならない、この問題意識から彼らは子ども研究を推進していた⁽⁹⁾。開化史段階説はあくまでも子どもの発達とカリキュラムの排列とを重ねてとらえる「仮説」であることは、C.マクマリーも認めており⁽¹⁰⁾、子ども研究の成果を待ちつつも、カリキュラム論全体の理論構造を成立させうる鍵概念になっていたことは間違いない。1903年にC.マクマリーの主著が大幅に改訂されるにいたった際、開化史段階説の説明が完全に削除されたことと連動して、中心統合法も相互関連法へと一中心主義を脱し、「ヘルバルト主義」という名を自他ともに用いなくなった点からも、開化史段階説が「ヘルバルト主義」を「ヘルバルト主義」たらしめていたことがうかがえよう。

このように中心統合法と開化史段階説は、ヘルバルト主義においては前者が後者を規定する形でスコープとシーケンスを合理化していた。急激な産業化・都市化、移民のアメリカナイズなど教育外からの要請がカリキュラムを過密状態にしており、ヘルバルト主義の中心統合法によるカリキュラム論は教科の縦割りの多数分立をダイナミックに再編するものとして全米に普及した。

2. 第2（第3）学年への位置づけとその根拠

さて、「ロビンソン」は、ヘルバルト主義の著作の中で、中心統合法が論じられているときより、開化史段階説が論じられているときに多く例証に用いられている⁽¹¹⁾。このことは、同じように中心教科を歴史（文学）と表現したドイツとは異なるアメリカ独自の問題意識とそれによる「ロビンソン」の位置づけの変容を示唆している。

表1は、ドイツ・ヘルバルト主義のラインの示した中心教科である歴史（文学）のシーケンスを表している。ここから明らかなように、ドイツにおいては、「ロビンソン」は、第3学年以降の宗教教育と事実史教育の分化（分科）前に位置づいている。この意味で、岩尾のいうとおり、ドイツにおいては、神観念と社会道徳を刷り込む教材として捉えられていたことは明確である。ところが、米国においては、公教育をいかに世俗化するか、教会などからいかに独立させるかが、19世紀末の課題であり⁽¹²⁾、ラインの開化史段階説はそのまま受け入れられなかったものと考えられる。後述するように、社会性をもった市民として人格形成を行うことに最も適ったと考えら

れた教材「ロビンソン」は、その宗教的品性陶冶を強調されることなくシーケンスに位置づけることが要請されたのである。このことを如実に示しているのが、表2や表3、表4に示された歴史のコース・オブ・スタディである。サモンはヘルバルト主義に影響を受けた教師であり、スパイエル・スクールのカリキュラムを編成したのはF.マクマリーである。この2者はアメリカ・ヘルバルト主義の影響をうけた教員養成系大学付属校での実践であるが、表4はヘルバルト主義の影響をうけた公立学校でのコース・オブ・スタディである。

アメリカ・ヘルバルト主義における「ロビンソン」の位置づけに関しては、学年としては、第2(3)学年に配置されており⁽¹⁷⁾、しかもインディアン等の原始的生活を扱った教材と併置されている。F.マクマリーは、アメリカ国民としての歴史を考えたとき、ドイツの開化史をそのまま採り入れることはできないと考えていたが、アメリカの歴史のルーツをたどることには、その国家としての歴史の浅さから困難であることを承知していた。そこで、歴史の排列を考える際にもヨーロッパ史(特にイングランド史)を視野に入れざるをえないことを認めていたが、「ロビンソン」が、フィクションとはいえ文明の進歩の方向性が凝縮された「原始的生活」を適

表1 ラインの開化史段階説⁽¹³⁾に基づく歴史・文学

学年	教育内容	
第1	民話とおとぎ話	
第2	ロビンソン・クルーソー	
第3	聖	俗
	大祖とモーゼ	チューリンゲン物語
第4	士師記と列王記	ニューベルゲン物語
第5	キリストの生涯	キリスト教化とシーザー期
第6	キリストの生涯	シーザー期
第7	パウロ	宗教改革
第8	ルター	国民国家形成

表3 スパイエル・スクールにおける歴史のコース・オブ・スタディ⁽¹⁵⁾

学年	教育内容
第1	オキュベーション
第2	オキュベーション、原始生活の一側面としてのエスキモー
第3	原始生活、アブ物語、カナダのインディアン、アルゴンキア人とイロクォイ人、岩窟居住のプエブロ族、ロビンソン・クルーソー、農業・居住・交通・貿易などの大産業
第4	ホメロスとそれ以降のギリシャ、ヘブライ、中世、発見と探検、ニューヨーク入植
第5	探検家の復習、パイオニア時代の物語を通じて

表2 L.M.サモンによるコース・オブ・スタディ⁽¹⁴⁾

第1・2 学年	イーリアス・オデッセイ・アエネイスからの物語、サガ、ノーベルゲンの歌、アーサー王物語、オーディン、ハイアウォーサ、ロビンソン・クルーソー、アラビアン・ナイト
第3・4 学年	ギリシャ・ローマ・ドイツ・フランス・イギリス・その他のヨーロッパ・アメリカの各歴史からの伝記

表4 インディアナポリス市における歴史・地理のコース・オブ・スタディ⁽¹⁶⁾

学年	教育内容
第1	おとぎ話、国民の祝日
第2	他の地の少数民族、ハイアウォーサ、インディアンの神話、さまざまな記念日、ロビンソン・クルーソー
第3	7人の姉妹、ギリシャ神話
第4	コロンブス、トロイ物語、合衆国の地理と関連させながら、インディアンの物語・ビルグリム・スミス・マーケット・クラーク・ブーン・デソト
第5	地理と関連させて、テン・ボーイズ、リビングストーン、スタンレー、ハドソン湾、ノースメン、コロンブス、カボット、ヴェスプッチ、コルテス
第6	アメリカの地理、ジャンプラン・ハドソン・フィリップ王戦争・ジョリエット・ラサール・フレモント・ルイス・クラーク・大陸横断旅行・毛皮貿易・ジェスイット

確に伝えるものとして位置づけられたのはドイツのそれと大きく異なる点である。つまり、「神観念の刷り込み」のためではなく、開化史段階において「原始的生活」を埋める教材としてインディアンにまつわる物語とならんで「ロビンソン」が配置されているのである。表2および表3は20世紀に入ってからのものであり、1890年代のように一学年を一教材でうめるほどには支配的ではないが、そこに併置された他の教材が、「ロビンソン」＝「原始的生活」に対応する教材として位置づけられたことを明確に示しているといえるだろう。

3. 「ロビンソン」にみる教育目的・教育目標論と実践プラン

以下に示した表5は、開化史段階説をもっとも早く体系的に紹介し解釈したヴァンリュー⁽¹⁸⁾が考案した実践プラン⁽¹⁹⁾である。このプランはおおよそ5回のレシテーション（授業）で展開されることを想定してある。子どもの思考過程＝学習過程ととらえ、それをレシテーションに翻案する方法が形式段階（formal steps）である⁽²⁰⁾。ここでは、第5段階の「適用」を除いて4つの段階が、つまり「予備」と「提示」を同時に行うこと（その効果を意図的に認めながら）と、「比較」「一般化」を2つの系統で進めることが示されている。注目すべきは、中心統合法のありようと、教材の背後にある教育目的論である。中心統合法については、地理・自然科学・数字・

表5 「ロビンソン・クルーソー」の実践事例案（VanLiew, C.C. (1894) より藤本が作成）

単元	新地でのロビンソン (Robinson in His New Home)	
目標	「船が難破したあとロビンソンはどこにいたの？また彼に何がおこったの？」これを探っていこう。	
形式段階	内 容	留意点・中心統合法
予備・提示	I 難破している間、彼はロビンソンをどこに投げだしたの？…家もなければ人もいない。どこに彼は仲間を探しにいったの？…ロビンソンは大声で叫んだけど恐くなりました。なぜ？…ロビンソンはどのくらい島にいたの？…彼はどこでねるの？（第1回目の再構成）	I、II、IIIはそれぞれ各一回のレシテーションで。物語の内容のマスター。 中心統合法（「ロビンソン」全体を通じて） 地理：星・コンパス・島の気候・季節・景色… 自然科学：火・光・石・煙・穀物・家畜… 数字：ロビンソンの生活した時間の測定や煙の測量… 書き言葉：ロビンソンと同じく日記をつけてみる 子どもの生活や他の物語との比較
	II 空腹でのどの渇いたロビンソンはどうなった？（…子どもの家庭生活と、島でのロビンソンとを絶えず対照させる）（第2回目の再構成）	
	III（主目標と連結させつつ）ロビンソンがどんな島にいるのか、もうわかったかな？（第3回目の再構成）（総合的な再構成）	
比較	（道徳的方向）家出をしてから彼はどうなっていったの？幸せだった？…彼の両親は彼よりも何が善いことなのか知っていましたか？ロビンソンと同じような目にあった人を他に知っていますか（ここで既習の Little Red riding-Hood を想起）どこが似ている？どちらも何が悪かったの？	（社会・経済的方向）もし食べ物が欲しくなったら、何をする？…どうやってお金を手にいれるの？ロビンソンはお金で買ったの？…もし彼にお金があったら、役に立ったでしょうか？…たとえ、私たちが見知らぬ町にいたとしても食べ物を買うし寝床もあります。でもロビンソンは？
一般化	私たちはみんな何をすべき？両親が一番いいと思っていることをすべきだし、感謝もすべきです。格言「両親を敬え」	…人といっしょに暮らしていると、一人ぼっちにならずすむし、助け合えるし、…お金も稼げるし、ものも買えます。

書き言葉などが、「ロビンソン」を中心に配されている。ロビンソン自身の行った創作的活動が、手工や算数・自然科学などの教科に馴染みやすいことが注目された。1890年代、中心統合法において「何を中心教科にするか」ということで論争があった⁽²¹⁾が、自然科学を中心とすべきであるとする立場からの批判に耐えうる教材として「ロビンソン」は好都合で、説得力もあったはずである。

一方、「ロビンソン」は子どもの発達段階に照らして、開化史上「原始的生活」段階に位置づく教材と解されたのであるが、それはあくまでも排列の問題であって、教材のもつ目的論や価値論に関してはどのように考えられていたのだろうか。F.マクマリーは、「ロビンソン」のもつ教育的価値＝教育目的を以下の3点に要約している⁽²²⁾。まず1点目は、人格形成（＝学校教育の最高目的）という目的達成に、「ロビンソン」は歴史科をのぞく他のいかなる教科よりも貢献するという点である。「ロビンソン」は怠惰な少年（＝一般的子ども像）が反省的になり、また神に従順になり、徐々に更生していく（＝性格を変化させていく）ことで、人から敬われ愛される存在になっていく物語である（またそのように教材化されている）。また、子どもにとっての理解の容易さが人格に一生涯にわたる影響を与えやすくさせている。2点目は、家庭生活や家族・友情のもつ価値を知ることができる点である。ロビンソンは両親の忠言をきかなかったが故に、絶海の孤島で孤独を強いられ、そのありがたさをかみしめることになる。また友人やささえてくれる仲間の不在もロビンソンの心を神との関係に没入させ、後には原住民のフライデーを保護し教育を施そうという思いにもさせた。3点目は、開化史段階の布石として、経済関係もふくむ社会における相互依存関係は文明がなしてきた進歩であるということを理解できる点である。

このように、道徳的価値と社会的・経済的価値とをあわせもつ教材であると解釈された（あるいはそのように教材化された）ゆえに、「ロビンソン」はアメリカ・ヘルバルト主義が重視する品性陶冶・市民性育成という教育目的の達成にもっとも近い教材であると期待されたのである。

現代的視点からみると、このような教材解釈あるいは物語改作（この場合、教材化）はきわめて恣意的で価値一元的であり、さらには徳目主義・注入主義であるとして批判は免れえないであろう。しかし、能力心理学（faculty psychology）がまだ有力であった19世紀末においては、「ロビンソン」はむしろ上記の目的（とくに道徳的目的）を達成するには、非効率的であり、徳目数も少ないと批判されていたのである。これに対して、物語の展開のなかで、上記のような価値が「絶えずあびせかけられ」るように提示されていないのは、この教材の弱点を示すものではなく、むしろ利点であるとF.マクマリーは説明している。人格形成にとって、授業の効果は、徳目の提示数や頻度には依存しないとの見方を示しており、数少ない価値の提示が子どもの感情移入や興味の誘発の度合いをむしろ増すことを主張している⁽²³⁾。ことは興味深いし、徳目主義・注入主義と評されがちなヘルバルト主義も米国にあってはその問題意識はむしろ逆であったことの証拠にもなるであろう。

IV おわりに

アメリカ・ヘルバルト主義にとって、「ロビンソン」は自己の教授理論普及のための要であったといえる。中心統合法については、「自然科学」を中心とする立場に対して「歴史（文学）」を中心におくことの意義を論ずるのに「ロビンソン」は説得力をもっていた。また、開化史段階説においては、自国の開化史が浅い米国にとって、事実史に入るための橋渡しとしての意味だけでなく、「原始的生活」段階の「歴史」に対応する初等「文学」教材としての意味ももたされた。この2点は、アメリカ・ヘルバルト主義のカリキュラム論における縦（シーケンス：開化史段階説）と横（スコープ：中心統合法）の両方を「ロビンソン」が担いうることを意味しており、逆に両理論はこの「ロビンソン」によってその妥当性・合理性が説得的に証明されていたともいえる。

カリキュラム論以上にこの教材が意味をなしたのが教育目的（価値）論においてであった。ドイツと同じ教材を扱いながらも、宗教性が希薄になり、道徳的価値と社会・経済的価値の両方が前面に打ち出され、その内容がレシテーションで「一般化」されていったことは、渡米したがゆえに起こった変容であり、「教育的ロビンソン」の変形譚史に加えることができるだろう。

1903年、開化史段階説は消滅することになるが、「ロビンソン」がその後のヘルバルト主義の所論（たとえばタイプ・スタディー論やプロジェクト・メソッド）にどう影響を及ぼしたか、また進歩主義学校での実践ではどのような意味がもたされていたのかは今後の課題としたい。

注

- (1) 岩尾龍太郎『ロビンソン変形譚小史 物語の漂流』みすず書房、2000年。
- (2) 同上書、p.6。
- (3) 同上書、pp.69-70。
- (4) 同上書、p.82。
- (5) 同上書、p.98。
- (6) McMurry, L.B. et al. : Robinson Crusoe for Boys and Girls, Public-School Publishing Company, 1894.
- (7) McMurry, F.M. : Value of Herbartian Pedagogy for Normal Schools, N.E.A. Journal of Proceedings and Addresses, 1892, pp.428-9.
- (8) Ibid., p.428.
- (9) 拙稿「アメリカ・ヘルバルト主義における子ども研究（Child-Study）の位置」『教育方法学研究』第26号、2000年、pp.1-9参照。
- (10) McMurry, C.A. : The Elements of General Method, Public-School publishing Company, 1892, p.126.

- (11) McMurry, F.M., op.cit. ; McMurry, C.A., ibid.; DeGarmo, C. : Herbart and the Herbartians, Charles Scribner's Sons, 1895など。
- (12) 拙稿「アメリカ・ヘルバルト主義における教科再編の原理」京都大学大学院教育学研究科教育方法学講座『教育方法の探究』第2号、1999年、pp.1-18参照。
- (13) VanLiew, C.C. : The Educational Theory of the Culture Epochs, National Herbart Society First Yearbook, 1895, p.99. ヴァンリューがラインの開化史段階説の表を英訳。
- (14) Salmon, L.M.: Some Principles in the Teaching of History, First Yearbook of the National Society for the Scientific Study of Education, I, 1902, p.54
- (15) McMurry, F.M. et al. : Curriculum of Kindergarten and First Five Grades of Elementary School, *Teachers College Record vol.IV*, Jan.1903, pp.22-59.
- (16) Indianapolis Public Schools : Course of study in Geography and History for Grades 1 to 8, 1899, pp.3-19.
- (17) McMurry, F.は、前掲の Robinson Crusoe for Boys and Girls の付録において、第2学年・第3学年のどちらにあるいは両方に「ロビンソン」を配するかどうかは、議論の余地があるとしている(p.1.)
- (18) VanLiew, C.C., op.cit.
- (19) VanLiew, C.C. : Method of Teaching Robinson Crusoe, Robinson Crusoe for Boys and Girls (appendix), Public-School Publishing Company, 1894, pp.12-15.
- (20) 拙稿「アメリカにおける「ヘルバルト主義」の受容過程—「形式段階」のレシテーションへの適用を中心に—」『カリキュラム研究』第10号、2001年、pp.59-71参照。
- (21) Lukens, H.T. : The Correlation of Studies, Educational Review, 1895, Nov.
- (22) McMurry, F.M. : The Educational Value of Robinson Crusoe, Robinson Crusoe for Boys and Girls (appendix), Public-School Publishing Company, 1894, pp.1-3.
- (23) Ibid., pp.3-4.

(慶應義塾大学教職課程センター助手)